

令和元年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ハナリ タカシ
氏名 羽成 隆司

研究期間 令和元年度

研究課題名 青年期男女における性的経験と身近な他者に対する接触回避の関連

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	羽成隆司	文化情報学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

申請者と共同研究者は対人的嫌悪感や接触回避に関わる心理学的研究を継続的に行っており、本研究もそれに連なるものである。本年度の段階では、調査対象を青年期の女性、接触回避の対象を父親に限定し、接触回避の特徴について、これまでの性的な経験や性的指向との関連から分析することを目的とした。質問紙調査では、回答者の恋愛経験・性交経験の有無、その対象となった人数、父親への接触回避の程度、2種類のポジティブ感情（尊敬・愛情）と2種類のネガティブ感情（軽蔑・嫌悪）、回答者の性的指向を測定した。これらによって、恋愛経験、性交経験、性的指向によって、父親に対する接触回避や感情がどのように異なるかについて分析した。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

調査対象者：女子大学生300名を調査対象とした。平均年齢は19.97歳(SD=.98)であった。
調査方法：性的指向、恋愛経験と性的接触の程度、父親への接触回避と対人感情（尊敬・愛情、軽蔑・嫌悪）の程度への回答を求めた。接触回避の測定は、Kawano, et al. (2011)ほかで使用してきた接触回避尺度を用い、大学の授業時に質問紙調査への協力を打診し、承諾を得られた受講者について回答を依頼した。
結果の整理：SPSS ver.23 を使用してデータ分析を行った。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究で得られた結果は下記の通りであり、羽成・河野・伊藤・梶川(2019)で報告した特徴が概ね再現された。

- 1) 父親に対する接触回避と回答者である青年期女性のこれまでの性的な経験との関連について分析したところ、性交経験がある回答者の方がいない回答者よりも接触回避得点が小さかった。
- 2) 性交経験がある回答者に限定した場合、性交経験の対象人数と接触回避得点の間の正の相関が有意傾向となった。
- 3) 恋愛経験の有無とその対象人数、および性的指向と接触回避得点との関連はなかった。
- 4) 父親に対する接触回避が性的防衛の一部を反映するものであるとしたら、恋愛や性交に慎重で、それらの経験が少ない女性の方がそうでない女性より接触回避の程度が大きくなる可能性があるが、これに合致した結果は、性交経験の有無による差異のみであった。性交経験の対象人数と接触回避得点には有意傾向ながら正の相関が見られたことはこの可能性に合致しない。
- 5) 上記のように、青年期女性の性的経験や性的指向と父親への接触回避との間に明確な関連は見いだせなかった。しかし、性交経験がある回答者の方が接触回避が小さいという特徴的な結果が得られた。
- 6) 父親に対する感情に性交経験の有無によって差がないことから、この接触回避の差が父親との関係の良好さの程度に起因するものとは考えにくい。
- 7) 女性に潜在する一貫した性的防衛の個人差というより、性交経験が、父親を含めて男性への接触回避を低下させる要因になり得るのかもしれない。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①父親	②接触回避	③性的志向	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

今後の研究成果公開予定

さらに男性のデータを収集して分析した後、文化情報学部紀要での公開を予定している。